

コロナ禍をどう生き抜くか <上>

新型コロナウイルス感染症は、人の生死、経済活動、国際交流などに深刻な影響を及ぼし、グローバル化や情報化など、現代社会ならではの状況と絡み、複雑な様相を示している。感染症研究の第一線で活躍する長崎大学教授陣の「コロナ禍をどう生き抜くか」に関する寄稿を3号連続で掲載する。

情報化時代と感染症 差別と偏見

山本 太郎

長崎大学熱帯医学研究所
国際保健学分野 教授

1990年長崎大学医学部卒。東京大学医学研究科博士課程修了。ジンバブエJICA感染症対策チーフアドバイザー、京都大学医学研究科助教授、コーネル大学感染症内科客員助教授、外務省国際協力局課長補佐などを経て、2007年から現職。著書に『抗生物質と人間』『感染症と文明』『新型インフルエンザ』（岩波新書）、『エイズの起源』（みすず書房）など。



歴史を繰り返してはならない

感染症の原因が病原体にあることを人類が知ったのは、19世紀後半のことだった。それ以前は、病気の原因は、悪い空気（瘴気）や天体運行の不調などにあると信じられていた。さらに古くは神の罰だと。

それでも、そうした病気の一部は、少なくとも現象として動物から人へ、あるいは人から人へと「伝る」ことが知られてもいた。14世紀ヨーロッパのペスト流行の際には、屋敷を閉ざして身を守ろうと考える人も現れ、検疫法が定められた。

1374年にはイタリアの都市、レッジョ・エミリアで隔離政策が採用され、1377年には、ラゲーサ（現クロアチア・ドブロブニク）において、検疫法が制定された。羊皮紙にラテン語で書かれた検疫法の原典は現在も残っている。

「疫病流行地から来た人は、セント・マーク島で一か月を過ごさない限り、ラゲーサに入ることを許さず。……感染防止のために」

一方で、そのとき隔離が実施されたイタリアの都市では、ペスト患者は、治療などもなく町外れに遺棄された。生命の帰趨は、神の手に委ねられ、許可なく患者に接したものは、財産を没収され、その身は火あぶりに処せられた。患者の家の玄関には、赤い×印が付けられた。そこに患者がいることを知らせ、同時にその家を封鎖する習慣は、ヨーロッパ中に広まった。

重要かつ深刻な倫理的問題もたらず

こうした対策が、当時、効果を上げたか否かは議論が残るが、一方で、こうした対策は、幾つかの重要かつ深刻な倫理的問題をもたらしした。第一は、隔離の名の下に、ペスト患者は遺棄されたこと。ペスト患者だけじゃなかった。ハンセン病患者も同様に遺棄されたという。患者遺棄は、歴史上、さまざまな場面で見られたが、隔離という政策はそうした行為に法的根拠を与えた。

歴史を見れば、異なる人、自分とは違う人を排除しようという行為は、災害や感染症流行といった非日常的状况の中で、当たり前に行われてきたことが分かる。

そのことを、忘れるべきでない。さらに悪いことに、そうした行為は、しばしば社会的立場の弱い人々、あるいは少数者に向けられる。14世紀ヨーロッパのペスト流行では、ユダヤ人が排除の対象となった。

● 迫害を正当化し慣れていった

ヨーロッパにおける最初のユダヤ人大量虐殺は、1348年9月、スイスのジュネーブで起きた。それは、あたかもペスト流行が広がっていくかのように、ほどなくヨーロッパ全土へと拡大した。

ユダヤ人が井戸に毒を投げ入れたという風説がユダヤ人迫害の理由とされたが、豊かなユダヤ人に対する嫉妬や、イエスの死に責任があるユダヤ人に対する反感が、長く、深くキリスト教徒たちの間に蓄積していたことも原因のひとつだったともいう。

住民たちは、ユダヤ人の死刑執行人にこぞって志願した。ユダヤ人居住区は襲われ、ユダヤ人は火あぶりにされ、処刑された。ドイツでは、処刑されたユダヤ人はワイン樽に詰められ、ライン川の川底に沈められ、財産は没収された。宗教的改宗の強制もあった。異教徒であることが迫害を正当化した。

ユダヤ人を保護しようとした人もいなかったわけで

はなかった。しかし、そうした行為は、そうした人々への攻撃の口実として用いられ、多くの人が自らの命をその代償とした。そして当初はユダヤ人への迫害に批判的であった人々も、やがて、そうした光景に慣れていったという。

● 情報化は異なるものの排除を容易に

傍観は正当化された。それは、ドイツナチス政権下でも見られた日常風景だった。ユダヤ人だけではない。貧しい住民やハンセン病患者の多くも迫害を受けた。ユダヤ人に向けられた迫害は、自らと異なると考える社会的弱者へも及ぶことになった。

このときに、ユダヤ人迫害や貧しい人々の迫害に加担した人々は特別な人ではなかった。ペストという厄災がなければ、どこにでもいる善良な人々であったという。そうした人々までが、それまで隣人であった人の迫害に積極的に参加する。そこに、偏見や差別の恐ろしさがある。

情報化は、そうした自分と異なるものへの排除を容易にする傾向がある。偏見や差別の恐ろしさを歴史が教えてくれるとすれば、それはまさに、現代の私たちに対する教訓ともなる。